

2012 年度公開講座

メインテーマ：「聞く」ことが開く可能性

～ 驚きの介護民俗学 ～

一般聴講も
歓迎いたします！
無料

- ☆ 講師 六車 由実 (むぐるま ゆみ) 氏
(特別養護老人ホーム介護職員、『驚きの介護民俗学』著者)
- ☆ 講題 『生前供養』としての高齢者介護
— 介護民俗学の実践から —
- ☆ 日時 9月24日(月) 午後1時30分～4時30分(予定)
- ☆ 会場 三重同朋会館3階講堂
(桑名市北寺町47 桑名別院内 / TEL0594-21-8000)



●六車由実氏

大阪大学大学院文学研究科修了。博士(文学)。専門は民俗学。東北芸術工科大東北文化研究センター研究員、同大芸術学部准教授を経て、現在、静岡県東部地区の特別養護老人ホーム内デイサービスに介護職員として勤務。



『神、人を喰う——人身御供の民俗学』(新曜社)で2003年サントリー学芸賞受賞。近著に『驚きの介護民俗学』(医学書院)。「事実を聞く」という行為がなぜ人を力づけるのか。聞き書きの圧倒的な可能性を活写し、高齢者ケアを革新する話題の書。A5 頁240 2012年定価2,100円(本体2,000円+%)

主催者からご講師に宛てたメッセージ

★お寺で生活する私たちは、門徒(檀家)さんとお付き合いの中で、あるいは社会とのかかわりの中で、さまざまなお話や悩みを聞かせていただきます。聞かせていただく側として、話し手に寄り添って聞いているのだろうか、自分の価値観や基準で聞いてしまっているのではないか、あるいは、傾聴を通して、自分もまた学び、自己を開いていけるような、そんな関係を話し手と結ぶことができているだろうかなど、忸怩たる思いを抱えています。六車さんのご著書『驚きの介護民俗学』に触れて、六車さんが介護の現場に民俗学のフィールドを発見され、さらには、介護を受けておられる人々の人としての尊厳性、いのちの尊厳性まで見出していかれたことは、私たちにとって「驚き」以外の何物でもなかったし、日ごろの私たちの要介護者に対する見方に猛省を迫るものでもありました。それは、ひとえに六車さんの傾聴に対する姿勢によるものではないかと思えます。私たちはそのあたりを六車さんから学ばせていただけないかと考えております。介護現場でのご自身の体験を踏まえていただいて、人と人との間において聞くということが持つ意味、可能性についてお話をください。

ご講師からいただいたメッセージ

★拙著『驚きの介護民俗学』でも書いたが、介護現場とは助ける側(介護職員)と助けられる側(利用者)との非対称的な関係で成り立っている。したがって、介護やケアの専門知識と技術を持っている「助ける側」は、助けがなければ日常生活が送れない「助けられる側」に対して必然的に優位の立場にある。それは、介護保険制度が導入されようが、利用者の尊厳を強調しようが変わらない事実なのだ。しかし、私はその介護現場の事実を前にして、時々いたたまれない気持ちになって苦しくなる。80年、90年という時間を生き抜いてきた人たちが死をまもなく迎えようとするその時に、一方的に助けられるしかない、という在り方とはなんだろうと思うのである。だから、そこに民俗学の聞き書きを持ち込むことで、一時的にでも、「助ける／助けられる関係」が、「教えられる／教える関係」となり、介護職員と利用者との関係性が逆転することによるダイナミズムが必要と拙著では訴えたのだった。(週刊『医学界新聞』2991号)